

短期集中C型のツボ

みんなで考えよう well-being ⑪

ともひろ
TRAPE 代表 CWD / 作業療法士 鎌田大啓

市町村は地域づくりの指揮者

い換えることができます。しかし、少子超高齢化社会の中で、地域の構成要因、つながりや関係性、活動などが刻々と変化しています。

結果としてフレイル期の高齢者の数が増加する現状もあり、健康寿命を長くする介護予防の取り組みが求められます。そこに住む方々がいつまでも自分らしいウェルビーイングな日常生活を送り続けるようにすることは、普遍的に重要なことです。

短期集中サービス「何と運動する」と価値が生まれるのか」を考える

地域は「ひと」「活動」「環境」が相互に絡まり合って成り立っています。介護予防の視点から言えば、ひとが自分らしいウェルビーイングな状況でなくなった時、ひとと向き合うことだけでは不十分で、活動や環境にも焦点を当てる必要があります。まさに重要なのが地域です。地域には多様な「活動」「環境」があるからです。地域支援事業の目的は、その地域に暮らす高齢者の暮らしを

「日常生活を支援・実現していくこと」にあります。そうすることで住民主役の視点へと転換ができ、視野が広がり、柔軟性が生まれます。そして、関係者と協力がしやすくなり、アイデアが生まれ、結果的に価値が産み出しやすくなります。

だからといって、介護予防を軸とした地域づくり(地域支援事業など)を行う時には、各事業同士の連動性・分野や背景を越えた連動など、1つの事業で完結するのははたまた多様なものが互いに関係し合うことが重要なのです。

短期集中サービスも例外ではありません。例えば、対象者のライフライン(介護予防ケアマネ「介護予防ケアマネシメント」、多様な背景のメンバーで対象者の可能性を掘り下げる「地域ケア会議」、対象者の日常に登場する「近所や「居場所」「通いの場」「お店」などの役割やつながりの連動のイメージ、自

分らしい日常生活を取り戻すことと目的達成につながるのです。

短期集中サービスは地域づくりのための1つの手段になるので

市町村の果たす調整役とは

地域づくりは、そこに暮らす住民が主役であり主体的に行うべきものですが、多くの人が関わり、多様な活動が存在し、財源が必要なため、全てを住民の自由任せにしましては、なかなか上手くいかなかったり、継続しにくくなったりすることもあります。

そこで、地域の中で誰かが首領

をとり、費用を工面し、様々な関係者や活動の体系的なつながりを生み出したり、組織化したり、人材を育成したり、地域資源を発見したりする必要があります。

足りないものは開発したりしていき、地域支援事業として表現する「ひと」、地域づくりは上手い可能性が高まります。この役割は、チームや組織を統括し、全体を導く立場であり、すべての関係者の活動を調和させて全体の成果へと結びつくように指揮する立場であるため、いわばオーケストラの指揮者(コンダクター)的なものになります。

つまり、市町村が全て自分で行うのではなく、自分達が目指すまじり(ひと)地域(ひと)から逆算してどのような仲間やどのような活動を目的を成し遂げられるか対話を重ねながら考え、資源(ひと)、事業(ひと)、チーム(ひと)、計画(ひと)を行っていくべきなのです。

得意なことが異なる方々を集め、それを掛け合わせて、目的達成という成果を生み出すことが重要な役割なのです。

